
あの空のどこかで

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空のビニanke

【ZPDF】

Z0702L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

組織が壊滅して5ヶ月が経とっていた。薬も完成し、江戸川コナンが元に戻った後の自分の存在

理由の有無を毎日のように考えていた矢先、哀はコナンの計らいでとある人物に会うことになる。 コ×哀×瑛祐 2009年度宮野の日作品Candlelight閉鎖に伴い移行小説

前編（前書き）

初めて書いた彼は、本当にあのヒトと同じ口調になってしまい、心残りです。

組織が壊滅して5ヶ月が経とつとしていた。

研究に研究を重ね、ようやくAPT-X4869の解毒剤の完成品が仕上がった。

それを告げると、彼はおおいに喜び、『工藤新一』を復活できることに喜び、彼の素性を知っている周りに触れて回った。

問題は、『江戸川コナン』としての別れを、どうやって蘭さんや子どもたちに伝えるかが彼の最大の悩みだつたわけだけれども、それも最近ようやく話をすることができたようで。ようやくほっとした彼の姿を見て、私も少しほっとする。これで自分の役目は終るのだ。・・・少しのアフターケアは必要にはなるけれど、半年もしたらそれも必要となくなる。彼と私の接点もこれで終るわけだ。それが寂しいのか、それも一つのケジメ、戒めとなるから割り切つていることなのか、清々としているのか。今はまだ実感がなくて。・・・といふか、先が少しも見えなくて。

私はずっと悩んでいた。

この先、私がどうやって生きるのかも。

元に戻つて、富野志保として生きるのか。

元に戻らず、灰原哀として博士のもとで暮らすのか。

ここを去るべきなのか、残つていいのか。

わからず、ここ数ヶ月暮らしていた。空に向けて問い合わせていた。あの空のどこかで姉や両親がいるとわかつっていたから。

ねえ、私はどう生きればいいの？何をしなくていいの？
どうすれば私が殺したたくさんの人々に償いをすることができる
かしら・・・？

それをあの人は、ずっと見ていたかも知れない。知っていたの
かも知れない。だから・・・。

あの空のどこかで

「灰原、あのさー。昨日からオレの知り合いがアメリカからこつ
ちに来てるんだけどお前のこと話したらぜひ会いたいって言つてて。
・・。会つてやってくれねーかな？」

学校帰りの帰り道。子ども達と別れて、2人きりになつてすぐ、
一本道を歩きながら、ランドセルを軽く揺らして、彼が言った。春
になれば『江戸川コナン』を卒業する人。

本当に何気ない表情で。彼はいつもそうやって子どもたちがいな
くなつた後のこの時間に、いろんなことを提案したり、無理難題を
押し付けたりする。

親しくなつてからはここ最近ずっとそうだった。だから、随分この道を通る時は警戒していたのだけれども。今回はどういうわけか、そこに気持ちを置いていなかつた。もしかしたら自分の知らないうちに一人感傷に浸つっていたのかもしれない。そうして思いもよらない展開に一瞬眉を顰めて困惑を示した。

「・・・はあ？何それ。説明が足らぬとさきて先が見えないんだけど。何で私が貴方の知り合いに会わなくちゃいけないの？そもそもその知り合いと貴方は一体どんな関係なのよ」

思わず眉根を顰めれば、彼は本当に忘れていたようで、「あーわりわり」と笑つてしまました。

「覚えてるか？本堂瑛祐。・・・あいつが来てるんだよ

本堂瑛祐。

その言葉に聞き覚えがあつた。会つたことのないけれど、既に頭に刻み付けられている彼の名前。

「・・・覚えてるわよ。CIAの水無怜奈の弟でしょ。証人プログラムを断つて、CIAになるための勉強をするために渡米した」

私は小さく息を一つつくと、髪の毛をかきあげた。そうして、彼の言葉の続きを待つ。

「そう。・・・そいつが今一時帰国してるんだよ。ほら、水無さん、今自宅療養してるだろ。だからしばらく弟が身の回りの世話をしているんだけど・・・。もうそろそろ彼女も回復してきたから、本堂もまたアメリカに戻るみたいで。・・・それであいつ、久しぶりに会いにきてくれたんだ」

そうだ。私はまだ見ぬ彼のことを、耳で聞いて知っている。彼の周りにあつた事実のこと。

水無怜奈はジンと戦つて左太股と右手首を拳銃で打ち抜かれた。そこで赤井さんやジョディさん達が助けに来てくれたので何とか逃げることができたけれど、組織の手下の姿を目先に発見され、体を庇いながら3階の窓から下に停まっていたトラックに向かつて飛び降りたが、そこでも着地を失敗し、そのまま意識を失った。幸い内臓には損傷がなかつたけれど、それでも出血が酷く、5日間生死をさ迷つた彼女。アメリカでその報告を聞いた彼はいてもたつてもいられなかつたのだろう。すぐに飛んできた。そして自分の知らないうちに組織と戦つたFBIやCIA、そして日本警察に強く抗議していた。

そう私は聞いていた。

”自分は除け者にされた。何のために僕はアメリカに行つたんですか。悪い組織と戦うために僕はCIAに入ろうと決意したのに…・！何も知らされないで、酷いじやないですか・・・！姉がこんな目にあつてから知らされるなんて…！…どうしていつも早く教えてくれなかつたんですか！？”

その潤んだ瞳には、悔しさが滲み出でていたという。彼の悲痛な叫び。この決断を下したFBIだけやCIAだけでなく、しばらくは工藤くんにさえ目もあわさず、口を閉じたまままでいたそうだ。彼女が意識を回復した後でも。

”FBIがこれからやろうとしていることを知つていて、それを俺があいつに何も知らせなかつたことを許せなかつたんだろ”

そう江戸川くんは辛そうな表情でいつか言っていた。

最初は、彼が加われば強い戦力になると工藤くんは思っていたようだけれど、いくら水無怜奈の弟で、頭の切れる男だからとは言え、これ以上まだ組織を深くは知らない一般人を巻き込むわけにはいかない。

一人でも犠牲者を増やすわけにはいかない。そうFBIが判断したようだ。

だからこそ敢えて何も彼に知らせなかつたのに・・・。

いや、もしかしたら、本堂くんはFBIの心の腹をわかっていたのかも知れなかつた。

だからこそ、悔しいのだらう。

自分が不甲斐ないから。何もできない自分が、一番許せなかつたのだろう。

「よかつたじやない。少しは心の整理がついたのかしらね」

「そうみたいだな。・・・昨日会つたとき、ようやく顔つきが元のあいつらしく戻つていたよ」

穏やかに笑う工藤くんを見て、私もなんだか口元が緩んでいた。が、ほだされかけて、あわてて話題を戻した。まだ自分がなぜ彼と会わなくてはいけないか、その答えを聞いてなかつた。

「で?何でそれが突然私なの?学校にも行つてないんでしょ?私はより会いたい友達がいっぱいいるんじやないの?蘭さんとか園子さんとか。彼のクラスメートだつたんじやなかつたの?」

「あー、いや。今回は会うつもりはないらしい。まだ怜奈さんの体も本調子じやないし、また次回にするつて」

「そう・・・なの

「ああ。ま、あいつの気持ちはわからなくもねーけどな・・・

「え?」

「きっともつと成長して・・・。立派になつて会いたいんだよ、あいつ。蘭には特に、な・・・。そして、きっとあいつはおまえに今話さなくてはいけないと思つてんだろうから。蘭や園子たちに会うよじもつと大切な

その最後に付け足した工藤くんの言葉の意味はわからなかつたけど、じゃあ何故自分は今彼と会つ必要があるのかの方が気になつたから、その先は聞かなかつた。

「会つてやつて、くれるよな?」

道を歩いていた彼の足取りがぴたりと停まり、また工藤くんがそう尋ねた。

蒼い瞳が自分を捉える。

私は小さくこくりとうなずいた。

「・・・わかったわ」

彼がどんな男なのか。何故面識のない私と会いたがるのか、すぐ知りたくなつていた。さつきよりずつと。

水無怜奈にそつくりな、影の背負つた男の子なかもしれない。

次の日曜日。私は紺色のワンピースを着て家を出た。約束場所に指定されたのは水無怜奈のマンションが見えるホテルの一室だった。8015室。そしてそのドアの向こうに彼がいる。深呼吸してブザーを押した。

「は、はい～」

思つたより高く間延びした声が返ってきた。本当に彼の声だろうか。一瞬疑つてしまふが、そのとき何かに躊躇したのか、ドシン、ゴトン、ズテーン・・・と激しい音がして、一瞬沈黙が流れた。

「・・・え？」

「・・・」

「ちよつ・・・」

たっぷり15秒ほど置いて、ゆっくりカチャリと鍵が回る音の後で、ゆっくりとドアノブが回った。

そこに現れたのは、ひ弱そうなメガネの少年。おでこを少し赤くさせて。

「どうも。・・・本堂瑛祐です・・・」

「どうも」

衝撃的な出会いに思わず言葉を失つて『灰原哀です』そう言おうとした次の瞬間、彼 本堂くんと呼べばよいだろうか その男の子は赤くなつたおでこを軽く撫でながらにっこり笑つてこう言つた。

「こんちは、灰原哀ちゃん。・・・よく来たね。2回目・・・だつたよね？君に会つのは。・・・いつやつてちゃんと話をするのは今回初めてだけど」

「え、あ・・・ええ」

一瞬戸惑つ。はじめましてだと思つたが、そういうえば一度会つていたことを思い出した。まだ組織を追つていたこの。本屋で、一度だけ。蘭さんと園子さんも一緒で、みんなでカラオケに行くというから自分はバスしたわけだけれども。

しかしそのことよりも、この屈託のない笑顔に疑問を感じる。彼は何も知らないのだろうか。自分の本来の姿も。そう問い合わせになつたとき、彼は言葉を続けていた。

「そして・・・お会いできて光榮です。富野志保さん」

突然、口調が敬語に改められ、握手を求めるよつと手を出され、私は一瞬体を固まらせた。
やつぱりだ。やつぱり彼は気づいていた。いや、工藤くんに知らされていたのだろうか。

上目遣いをして自分を見つめるその瞳は黒いピロードのように輝いていて。そして確実に自分を捕らえている。
けれど、うつすらと微笑んでいた。・・・何かを探つとしているわけでもない、ということは瞬時に判断できたのだけれども。だから、否定はしなかつた。ただ、一言だけ。

「あなたは、何を、ビリまで知つてゐるの？」

「どうしてそんな穏やかな表情をしてゐるの？」

「こんな表情をされてはしらばつくれることもできないし、そもそもするつもりもなく。小馬鹿にしているわけでもなく、媚びるようなわけでもなく、哀れんでいるわけでもない、この表情。ただ、穏やかに笑つてゐる。

「……そうですね。新一さんを『コナンくん』にした薬を誰がいかにして作られたかという話から始まって、その人の素性と、そしてその人が今どんな風に生きているか、ってところくらいですかね。まさか『彼』と同じ小学生になつてゐるとは思いませんでしたが」

自分で調べたのか。『彼』が話したのか。あの意味深な工藤くんの発言、表情。もしかしたら伝えなくて済むことは知つていたのかもしない。

一体どんな風に知つたのか今知るべきではないのだらうか。

「あの」

「・・・ああ。『めんなさい。別に貴方を驚かせたり警戒させるつもりはないんです。・・・僕は貴方の味方です。』

・・・多分。知る限りではきっと今は、誰よりも、貴方の気持ちを理解できる。多分貴方が今どう考えているかわかるから。・・・それを止めてに来たのです。いや、貴方とただ、話がしたかった。ちやんといつこいつ形で、ゆつくりと」

彼は、はあ・・・と小さくため息をついて、それから口元だけ笑

つてみせた。そうして、「座つて話しませんか?」と奥のソファを指差した。それに私は促されるまま、ソファに向けてゆっくりと歩き出したのだった。

ホテルのテーブルは、アンティーク調の気品漂う木製のしつかりとしたテーブルだった。そして、それをはさんで向かい側のソファに腰掛けている彼が何か話すのを、今か今かと待ちわびていた。そうしながらも、ホテルのスタッフが用意してくれたミルクティーを一口飲み、緊張をどうにかして抑えようとしている。

「さて。・・・落ちついたところで、そろそろ話しましようか。・
・僕がどうして貴方に会いたかったかそのわけを」
「そうね、そうしてもうと助かるわ」

その言葉を受けて、ふっと彼、本堂くんが笑った。眼鏡の奥の瞳が一瞬だけ細くなる。

「僕ね、貴方のお姉さんを知ってるんです。貴方のことも、聞いてるんです。・・・だから、それを知らせた上で、君に僕の気持ちを話したかった」

「え」

耳を疑う。

今、なんて？

驚いて彼を凝視していた。コーヒーカップを持つその手が小刻みに震え、中身がふるふると漣のように波立つた。

まさか彼の、「この本堂瑛祐という男から」の名前が出てくると思わなかつたから。

いや、自分の名前を知っている時点での名前が出てくるのもわかつていなければならなかつたのかもしけなかつたけど。

けれども、相変わらず彼は穏やかに、いや、少し緊張しているような面持ちで話していたから、無心で聞きたい気持ちと、彼が発する一つ一つの言葉を拾つてその意味を探らなくてはならないといふ気持ちと半々だった。

もう組織は崩壊し、そもそも彼は CIA の父親と姉を家族に持つ男なのだ。工藤くんもたくさん彼を見てきたはずだ。

なのに、どうしても彼を疑わなくてはいけないと感じてしまうのは、長年組織からの圧力や、組織から迫われ続けてきたことに対する恐怖、拒否反応に加え、彼が発した『姉』というキーワードに反応してしまったからなのだろうか。

物覚えついたときから両親を知りず^レ育ち、なおかつあまり触れ合つこともできなかつたおねえちゃん。それでも、おねえちゃんはおねえちゃんだった。たまに会つときは組織のあの何とも言いがたい空氣から解放できる存在を作つてくれたのがおねえちゃんだった。そのおねえちゃんのこと、自分の知らない一面を彼が知つているということ。

それがウソなのか真実なのか。自分の中の『おねえちゃん』を穢すのか、それとも……それを今からこの男が発しようとしている。どうしても精神を研ぎ澄まさないといけないことだったのだ。

「……僕ね。2回、会つてゐるんです。彼女と。富野明美さんと。……一度めは、11年前、病院で。そうしてその次はばつたり道端で。彼女が亡くなる1週間前のことだったかな。……あの10億円強奪事件の」

「……！」

「何を、どこから話そつかな……。言つてゐる僕もどう話していくわからないんですけど……」

困ったように笑いながら、「それでも貴方に今伝えたくて・・・」とゆづくつその思い出を言葉にし始めた。

「まずは・・・。11年前のことです。僕が初めて彼女に・・・。明美さんに出会ったときのこと。僕はある病気をして入院していく・・・。それを治すための手術を数日先に控えて、緊張していたのを覚えています。・・・何だか落ち着かなくて、院内をブラブラしてたら、僕より4つ5つくらい上に見える女の子が・・・。小学生高学年の女の子が、血まみれで虫の息の子猫を抱えて、涙ぐんで医者に掛け合っているのを見たんです」

“この子を助けて！お願い、死にそつなの・・・！”

「サラサラとした黒髪の綺麗な、目のくりっとしたかわいい女の子が、水色のワンピースの胸元をぐつしょりと真っ赤に染めて、その猫を抱きかかえて。ここには動物病院じゃないから。・・・逆にそんな猫、ここに持ってきていやいけない、動物病院探してあげるから、なんて宥められてて・・・。病院の前で撥ねられたみたいで・・・。

白い病院の床に赤い血が点々と垂れていくし、患者さんは早く外に出せなんて叫ぶしで。すごく大変だったことを覚えています

10年前というと、おねえちゃんは12歳。動物が病院で診てもられないことぐらい重々承知だつただろう。それでも、助けてあげたかったのだろう。救わなくてはいけないと思ったのだろう。目の前で消えていく命を何とかして食い止めたかったのだろう。

「結局その猫はあつという間に冷たくなつて。綺麗な艶の毛をやわらかそのお腹を、まるでペンキに塗られたように真っ赤に染めて、・・・鉄の匂いをブンブンとさせて。死んでいくその猫を労わるよう、時折、毛並みを撫でて・・・。そんな彼女の後姿を見て、僕は声もかけることができずに・・・。結局彼女はすぐに追い出されてしまつたんです。病院の職員に、僕たちの目の前で・・・。困つた子だなんて罵られながら、周りの大人に白い目で、軽蔑するような目を浴びせられながら。・・・僕より随分背の大きな彼女が泣きじゃくりながらとぼとぼと冷たくなつた猫を抱えて歩いていく様子を、僕は玄関からずっと見ていました。彼女が病院の門を出て姿が見えなくなるその瞬間まで。

・・・それは、ほんの10分15分の間しかいなかつたけど、彼女の顔は僕の脳裏にずっと焼きついてました。

・・・もう会うことはないと思ってました。・・・病気を治すための大きな手術を終えて・・・いろいろあつて僕は大阪にしばらく住むことになつたから・・・。戻ってきてもある街には戻らなかつたし・・・。

けど、会えたんです。確かに僕は君のお姉さんに、あの日

本堂くんはそうして言葉を止めた。そして彼もまたミルクティーで喉を潤す。

「東京のど真ん中。あんなに人が混みあつてる、渋谷のスクランブル交差点で。僕は彼女を見つけたんだ。

向こう側で信号を待つている彼女の姿を・・・。子供のころしか知らないのに、しかも10分15分しか彼女の姿を見ていないのに。・・・何より、一言も話していないのに・・・。僕は、そこにいる彼女が、『あの時』の彼女だとわかつたんですよ」

瞑想するように視線を下に下げ、そうして彼もまた、自分の手元に置いてある「一ヒーカップ」に口をつけた。

その動きを私はじっと目で追いかけた。早く話が聞きたくて、急かしたかった。そんな遠まわしに言わなくていいから、早く先が知りたくて。「どうして？」の『ど』と声が出掛かつていたとき、彼は再び話を再開した。

「彼女は僕に声をかけられたとき、何故だか一瞬怯えた表情をして、その後逆にすごい勢いで睨まれ、僕の腕を振り切つて・・・。僕だけにしか聽こえないほどの小さな声でそう叫ばれたことを覚えている」

“約束は明日のはずよ！”

「やく、そく・・・？」

「デートか何かの約束でもしてたのかと一瞬思いましたが、顔の知らない人とのデートなんてするわけでもないし、何よりそんな怯えた顔なんてするわけがない。なのに、彼女は何故か僕の手をとつて、今きた道を引き返していくんです。そうして、とある喫茶店に連れられて・・・。奥の席ですごい怖い顔をしてるから・・・。

人違ひだと思って、僕が慌てて弁解すると、びっくりした表情をして・・・」

「そりゃ、そうでしょうね・・・」

私はこんな大事な話なのに、思わず鼻で笑つてしまつた。約束をしていた相手とは人違ひだつたということに気づいてしまつたときの衝撃ほどびっくりすることはない。

けれど。私はピリリと表情を強張らせた。

「お姉ちゃん・・・姉が会うはずだつた相手つて・・・」

「組織の誰かがだつたんでしょうか。今になつたらそもそも考へるんですけど、あのときは・・・。明美さんが亡くなつたという新聞を見たときは、10億円の強奪事件の犯人と密会するつもりだったのかなとも思つて」

「・・・」

「・・・でもね、僕はやつぱり信じられなかつたんです。・・・あのとき、僕が人違ひだとわかつて・・・ああ、誤解がとけるまですごく警戒されてたんですけど・・・。病院で猫のことを見ていたなんて話したらすごく驚いて、僕が一生懸命話していたら、そのうち少しづつ・・・あのときの気持ちをたくさん話してくれたんですが・・・」

確かに、彼の様子を見ると、警戒してる気持ちが少しづつほぐれていくよつた気がする。今だつてそうだ。

こんなに一語一句聞き逃さないようことじつてゐる。「工藤くんも、彼を疑つていたとき、そういう感情面が大きく影響されたと言つていたから。

姉も・・・。お姉ちゃんも、そうだつたのかもしれない。けれども・・・。それでも私は一つ彼の話でひつかかる点はあつたのだけれども、深く訊くことはしなかつた。それよりも訊きたいことはたくさんあつたから。

「明美さんがしてくれたその話を聞いてると、僕はどうしても彼女が10億円強奪事件の主犯格だとは思えなかつたんです・・・」

「そうよ・・・、だつてあれは私を助けるためにしたことだつたんだもの・・・」

「・・・でしうね

本堂くんは眼鏡の奥で優しく微笑んだ。その表情には憂いにも寂

しさにも見えた微笑みだった。

「わかりますよ。・・・明美さん、とっても妹さん思いの人でしたもの・・・。だから僕は自分の姉にも会いたいと思つたんだ。明美さんを見て。・・・小さいころ、自分をとってもかわいがつてくれていた姉も、まだ自分を思つていてくれているだろうか、って。会いたいって純粋に思えたんです」

「・・・姉は何て？」

「・・・そうですね・・・。11年前に亡くなつた猫ちゃんのことを教えてくれたんですけど。・・・あの後、お世話になつているお家の庭の片隅に、いつでも声をかけてあげられるように、こつそりと埋めたそうですが・・・。

その子はね、とつても大事な子だつたんですつて。妹さんと飼つていた猫・・・。もうしばらく会えない妹さんにいつでも元気な姿を見せてあげたかつたんだ、と。だから何とかして助けてあげたかつたんだ、と」

「！－！」

そういうえば・・・と思い出す。

確かに、小学校へ留学しなくてはいけなくなる前は、留学後よりも僅かだけれども姉と頻繁に会うことができた。

そうして2人で組織の監視下のもと、遊ぶことが許されていたとき。・・・道端の段ボール箱に捨てられていた猫を拾つて、飼おうと約束していた気がする。・・・数回遊んだりすることができただけれども、あつという間に組織からアメリカへの留学を強いられ、気がつけば日本を発つっていた。そうして日本に帰れず9年の月日が経つていた。あのころは組織の教育と、学校の勉強とで、ずっと缶詰状態だった毎日。精神状態は追い詰められ、学校では孤独を感じ、姉を支えに私は生きていたような気がする。小さいころに数回遊んだはずの猫の存在すら忘れていた。

『『あのとき遊んだ猫のこと』はあの子覚えていないみたいだけど・
・・でも、仕方ないってわかってるんだ』』

「え？」

「あの人と言葉です。僕にそつやつて告げてくれた言葉。寂しそうというよりか、また違つ意味に聽こえた」

“あのとき遊んだ猫のことはあの子覚えていないみたいだけど・
・でも、仕方ないってわかってるんだ。

だってあの子私よりずっと大変な思いをしてるもの・・・。あの子が一人でアメリカに行かなくてはいけない時も、私はこうして日本に残つて、おじさんとおばさんに育ててもらつていたわけだし・
・・・。メルも・・・。あの猫とも一緒にいられた。・・・。だけどあの子はこの9年間・・・ううん、生まれてからずっとほとんど1人だつたもの。・・・だからね、早くあの子を幸せにしてあげたいの”

“幸せって・・・？”

“『幸せ』よ。・・・大丈夫、きつともうすぐ掴めるわ。・・・
あ、そうそう。今のことぜーんぶ内緒にしてね！
誰かに言つたら、貴方、殺されるわよ？”

“えつ・・・”

“でも、そうね・・・。いつか・・・いつかもし、あなたが私の
妹に会えたら、気が向いたら伝えてほしいな。”

曰

『つて”

“・・・はい。・・・はい、いいですよ？”

“ありがと。あの子としばらく会えなくなるといひだつたから。
・・ほつとしたわ”

「・・・『守つてあげられなくて、』めんなさい』

「え?」

「彼女が僕に託した、貴方に向けての言葉です。・・・それはどういう意味ですかね?」

「・・・愚問だわ」

私は答えた。

ポロポロと涙が目頭から零れていく。

『2人で育てていこうと決めた猫を』守つてあげられなくて『めんなさい。

『もう、貴方を』守つてあげられなくて『めんなさい。

『でも、生きられるわよね?』

「・・・生きられるわ、私は

どうしてこう間を置いて彼は訊くのだろう。次から次へと涙が零れて、言葉にならなかつた。

しばらくして、本堂くんはまだ半分も減っていないミルクティーをわざわざ熱いものに変えてくれた。

・・・ もう私はそれにまだ手をついたこともできないのだろう
けども。

「知つてましたっけ。僕の姉、CIAの諜報員なんですよ。それで以前、しばらく組織に忍び込んで

「・・・知つてゐるけど・・・。そんなあつけらかんとばらしていいの？秘密組織なんでしょ。そんな国家機密、知つてゐるか知らないかわからない人なんかに気軽に口に出したらあなたお姉さんに

「志保さんだから話すんです……あ、でも内緒にしてくださいね。」

「僕の父も諜報員だつたのですけど・・・。自分と接触しているときに組織から発信機が姉に付けられていたのを発見し、この場所に来るのも時間の問題だつてことを知つて、・・・姉を守るために自らを犠牲にしたんです。そうしてそのおかげで姉は組織から信頼を得ることができた。

・・・明美さんも、自らを犠牲にして貴方を助けたんでしょ?』

「ええ。結局はおねえちゃんが死ぬだけで終っちゃつたけどね。・
・でもそれをきっかけに

私は組織から抜けようと思つたし・・・。それに、工藤くんや
貴方たちと出会いきっかけになつた」

「僕ね、「ナ・・・新一さんから話を聞いたんですよ。彼の仲間に
は组织に深く携わった人がいて、今は一緒に组织と戦ってきた
人がいる、って。そしてその人は僕と似たような境遇にあつている人
なんだって。・・・だから、・・・あ、これ、言つちゃいけ
なかつたことでしたかね？」

「いいわよ、別に」

再び慌てる本堂くんに対して、私は思わずクスリと笑つた。黒幕
はもう一人いたのだ。

最初からすでにわかっていたことだけでも。

「でも、それを知つたらやつぱりこのことは話したいと思つたん
です」

「・・・私も、それを聞けてよかつたと思ってるわ。・・・
・ずつと、思つていたの。姉と会う約束を破つてしまつて、・・・
本当なら亡くなる2週間前には会えるはずだったのに。全然話せな
かつた。

自分の命を犠牲にしてがんばりうとしてたのに、最悪よね・・・

「・・・そうですね。・・・そう思つてゐるのだったら、一生懸命
今を生きることですよ。・・・それがお姉さんへの償いですよ。人
のためにじやなくて、自分のために」

「え」

「ずっと、悩んでたんだしょ。元に戻るか、戻らないか」

「それも、あの人から?」

「はい」

「ハーフコリ笑つて、本堂くんは笑つた。私もその笑顔に思わず笑顔が零れた。

「あなたが宮野志保さんでも、灰原哀さんになつても、きっと明美さんは見守つてくれますよ。

勿論、お父さんもお母さんも。『志保は志保なんだから』ってずっと応援してくれてると思いますよ。だから・・・」

「わかつたわ。・・・ありがと」

私はそこによつやく再び「コーヒー カップ」に口を付けた。少し熱めのミルクティーが喉を通る。少しチリリと痛い。

そうして皿の上のクッキーを一つ手を伸ばした。それに対してもうとした表情を彼はしたようだ。

「何?」

「いや、初めてクッキー食べててくれたから。よかつたな、と思つて。きっとお父さんもお母さんも、

明美さんも手を叩いて喜んでいると思いますよ

「手を叩いてって・・・そんな大げさな」

「いや、おめでとうーーって絶対言つてはいけない!そして、きっと僕のお父さんも、お母さんも。ハーフコリ志保さんと出会つたこと、話してこるにもきっと喜んでこるとおも・・・わやーあちちー!」

興奮して立ち上がった瞬間、コーヒー カップが倒れ、中からたくさんの中のミルクティーが零れ、テーブルに染みを作つた。そして彼の足にも零れ落ちる。相変わらずのこの男に、思わず私は咳いた。

「やつぱり、信じられないわね、今の話。・・・少し、・・・てい

うか大分作つてない?」

「え、何で?!僕ウソ一つも言つてないですけどーー!」

「だって・・・。いくらなんでも、おねえちゃん貴方を組織や10億円強奪事件の犯人だなんて勘違いするはずないもの・・・」

「し、失礼な・・・!でも間違いなく人違いしてたんですよ!!

!」

「じゃあウソは言ひすぎかもしれないけど、そこは夢とか、むしろ記憶の履き違いとかじゃないかしら?」

「ぱつ・・・そんなはずありませんばー!」

必死に否定する本堂くんに冷ややかな態度をしつつも、私はふとホテルの窓から見える空を見上げた。

高い高い空。そして真っ青な青。私の大好きな色だ。

果たして、その疑惑は自分が天寿を全うするまでのお預けとなってしまうわけだけど。

それでも私は彼の言葉が全て本当であればいいと思つた。そうして、あの空のどこかでこんなやりとりを笑つて見ていほしいと心から願つた。

2009年宮野の日投稿作品です。

今年も作品書くぞ！と意気込んでいましたが、もともとのスランプと、宮野家の話の情報が少なすぎて、ネタもつきて・・・。今回はひじょーーーに行き詰っていました。

けれど、どうしても作品投稿したい！ということ。ようやくない頭をフル以上に使って、出した人物が、本堂瑛祐くん。彼は私にとって、とっても残念な結果に終ってしまったのです。

何故、哀ちゃんに接触させなかつたの！？あのときはすこく不完全燃焼をしました。や、哀ちゃんが帰るところで「えええつー？ここで帰っちゃうのー？」みたいな（笑）すぐ悔しい思いを。

そして、そのままあの人には日本を発つてしまつました・・・。（笑）。正体ばらして、蘭ちゃんの気持ちも伝えて、お互いすつきりだと思ふけど、こちちはモヤモヤしちゃつたサ！（笑）このまま最終回付近まで彼を見れなくなるのかなって思うと・・・なぜだ！？みたいな（笑）彼のジギキャラは結構哀ちゃんと合つと思つたし。

それにね。眞面目な話。

彼と哀ちゃんでは似た要素を持っていたと思います。彼も、哀ちゃんも共に両親を亡くしてる。そうして、2人には年の離れた姉がいて、姉はまた、妹を、そして弟を愛していながらも、この十数年間、あまり一緒にいられずに過ごしてきた。そして、瑛祐の姉 水無怜奈は CIA の諜報員に、哀ちゃんの姉 明美は黒の組織に、とお互い立場は違うけど、そんないろいろ謎あるところに属してて。

本当は、明美さんと水無さんも接触させたかったんだけど、その話を混ぜ込むとさらに大変な話になつて……。今の私にはきっと收拾しきれなかつたので。

今回はここまで。とにかく、お互い似た要素を持っている二人に、接触させて、哀ちゃんの不安やいろいろなものを吹き飛ばしてあげさせたかつたんですね。

で、猫の話は……ハハ、無理やりです（笑）。瑛祐くんと哀ちゃんを接触させる中で、明美さんの話をさせるのではやつぱり普通に彼が明美さんを知らなければ説得力が欠けるかな、と。そうして、二人を合わせたんです。小さいころ、病院で、つていう設定で。そういうエピソードと、そうして大人になつた彼女との会話も入れたくて。欲張りすぎたかな、と思いつつ、でもやっぱり小さいときの話より、大人になつてからの話の方がうまくコトバが出てくるような気がして。けど、小さいときの話がなければこんななんてーか、腹を割つた……というか秘密な話を見ず知らずの少年に伝えないだろうな、とか。

あのときの、いうなればあまり人には話したくない状況の自分を見られて、そうしてそんな自分を覚えていて、声までかけられたといふことに、何か運命的なものを感じてしまつたからこそ、こんな話をしたのかな、と。だからこの二つの接触が必要だったわけです。

毎回毎回、明美さんと志保さん（哀ちゃん）を絡めると、どうしても最後は『生きて』

『精一杯の人生を全うしてほしい』『心から笑つてほしい』そんな話になつてしまふのですが（笑）。そうして今回もそんな話になつてしまつたかなあ……でも、こういう話が好きなのよ……！すみません……へへ

今回の話、初めて瑛祐くんを書きましたが、本当に楽しかつたで

す。ドジキャラ、無理やりつくってみましたが。どうしても語り口調だけだと、表現力とかが乏しいので、みつたんに見れてしまうのです。だから無理やりね。でも、群馬県警の山村刑事にもどうしてもイメージしちゃうんだよな。・・・の人もドジキャラですよね（笑）

最後までお読みいただきて、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702/>

あの空のどこかで

2010年10月10日00時29分発行